

第 2 号

いせさき美尋

ひじん

景観サポーター情報紙

特集：いせさき発祥の地「もろこし横丁今昔」

報告：景観街づくり先進地視察「栃木市～那須街道」

特集：いせさき発祥の地「もろこし横丁今昔」

まえがき

伊勢崎の街並み発祥の一説として、とても興味深いお話を景観サポーターであり郷土史家の星野正明様からお聞かせいただきました。歴史的背景を知った上で住み慣れた伊勢崎の街を散策してみてもいいでしょうか。見慣れた街がきっと違う景観として皆さんの脳裏に映し出されることでしょう。過ぎ去った思い。活気に満ちあふれていた時代。災害や戦争の記憶。華やかだった産業都市の面影。その人ごとの心象風景を思い描けることと思います。この特集を多くの市民の方々に読んでいただけたなら幸いと思います。

転居で感じ取れたもの

私は最近茂呂町に引っ越しをしました。

茂呂蔵山(くらやま)という古墳の近くで、塚の頂上から鎧、馬具、鉄刀が出土しました。中世では新田岩松氏陣屋政所(まんどころ)跡で小字名は、連蔵(れんぞう)です。

歴史研究会の建てた標識により、この場所が茂呂地区の行政と流通経済の拠点であった事をうかがい知ることが出来ました。同研究会の活動が偲ばれました。

地名、形は見えなくとも、その内容を知る上での「景観の顔」であると感じました。

そこで、伊勢崎の地名由来と茂呂とのかかわり合いをひもといてみました。

地名「伊勢崎」と

「伊勢崎の街並み」の起源

伊勢崎には赤石と呼ばれていた時代がありました。戦国時代幾度となく火災に悩まされ困っていたところ、その原因が「地名の赤が火を呼ぶ」との説が、ちまたに流れていました。

時期を同じくして、城内に祀られてあった伊勢神宮が城外の広瀬川左岸の高台に移されました(写真1は参考としての赤石稻荷)。



「伊勢に行きたい、伊勢路が見たい、

せめて一生に一度でも」と詠まれたほど参宮

は憧れの旅だったのです。

そこで近在の農民や商人がお参りしやすくなり、農業の豊作祈願で大賑わいしました。

周辺では、自然発生的に物売りが出て物流が始まり伊勢神宮の前から東に道が開けました。徐々に出店者が増え街を形成しました。神宮自体の名前も伊勢前(さき)となり、その沿道に店を出した人の多くが茂呂地区の農民でした。

出身地の茂呂の氏神である飯福神社を勧請して、五穀豊穰、商売繁盛を願ったところから、通称「茂呂越様」(通り)と呼ばれるほどであったそうです。

これが伊勢崎の町並みの始まりです。

伊勢前は「先」とも「崎」とも書かれたので、今の「崎」に統一されました。

稲垣氏と都市設計

徳川時代になり稲垣氏が一万石の大名で領主となりました。

まず行ったことは町造りでした。城のすぐ南に、東西の本町通りを普請しました。そこで市が始まり、かつてのメイン通り(本町通りの南の通り)辺りを裏町と呼ぶようになりました(伊勢崎古図面にも書いてあります)。

伊勢宮、飯福神社合祀と通りの歴史

伊勢宮の別当寺は千寿院でした。千寿院が、明治の廃仏毀釈運動で廃寺となり大正15年に伊勢宮は裏町の飯福神社(建保元年9月3日:1213:創建)に合祀され社名も「伊勢崎神社」と改称。同時に町民全体の鎮守社に指定されました。その後、伊勢崎神社(写真4)の社殿を現在の東向き正面に移したのです。本光寺(貞永年:1232:創建)(写真3)は太田の子育呑竜様をお迎えして毎月七日を縁日と定めて盛大に御開帳や稲荷講を行い地域興しに力を入れました。それらにより通りが大そう賑わいました。

織物の銘仙も好景気の波に乗って各種商店や旅館、料亭、ストア等が軒を連ね徐々に西町の街並みに通じるようになりました。町名も裏町から宮本町と改まり「神社通り」と「宮本町通り」も大繁盛しました。

戦争中、町の氏神様となったので戦争に出征する町民の武運長久の祈願所となり、大いに発展しました。またそれら商店街は戦災を免れていたため、戦後復興もいち早くパチンコ店や映画館(大盛座・東宝劇場)等が進出し、東方の南銀座商店街に連結、加えて南町の盛り場に隣接したので活況を呈したのです。



茂呂の:村社飯福神社



かじ町から川岸町へ

西町は伊勢崎地名発祥の地であり、本町西にあった川岸町は徳川時代職人が多い地域でした。

鍛冶屋を城から離し一まとめにした工人の集落「かじ町」と呼ばれていました。後に武孫平が水運の河岸を開設したので「かし町」となり、それが廃止されて川岸町となりました。「地名はその時代を語る顔として、変わっていくものだな。」と思うとその流れを知って「井の中の蛙」から抜け出す事が必要なのだと思います。

おわりに

前述したような地名話の説明板や由来碑などを各町区に建てたらどうでしょう。その周囲に花壇を造り、各町内の特徴を出して、新しい名所のポイントとなることでしょうか(前橋市に事例があると聞いたことがあります)。茂呂に転居し、景観サポーターとして感じたことを書きました。渋川市では年に一基ずつ、立派な地名碑を継続して建設しているそうですが、各町区のアイディアにまかせ、申し合わせで実現すれば行政の負担も少なく、現実味ある企画だと思います。

(文、星野正明・写真、佐藤)

写真 1



写真 2



写真 3





丸に剣片喰(ケンカタバミ)は、江戸時代終焉の伊勢崎藩主「酒井氏」と同じ家紋



伊勢崎神社拝殿

用語の説明

別 当 寺: 別当寺(べっとうじ)とは、神仏習合が許されていた江戸時代以前に、神社に付属して置かれた寺のこと。神前読経など神社の祭祀を仏式で行う者を別当(社僧ともいう)と呼んだことから、別当の居る寺を別当寺と言った。

神宮寺(じんぐうじ)、神護寺(じんごじ)、宮寺(ぐうじ、みやでら)なども同義。

稲 荷: 稲荷神とは、食物神・農業神・殖産興業神・商業神・屋敷神のことで、日本の三大稲荷には伏見稲荷大社・豊川稲荷・祐徳稲荷神社(ゆうとく)などがある。

神 社 通 り: 伊勢崎神社東側の南北通り。

宮 本 町 通 り: 伊勢崎神社南側の通りで神社あたりから西へ西町通りまでの範囲。

報告：景観街づくり先進地視察「栃木市～那須街道」

蔵の街・とちぎ 街歩きレポート

2010年10月23日、伊勢崎市景観サポーター活動の一環として栃木県栃木市及び那須塩原市の視察に行き参りました。参加者はボランティアメンバー9人、伊勢崎市の職員5人の計14人です。伊勢崎市役所を8時5分に出発し、栃木市「蔵の街第1駐車場」に到着したのが丁度10時。以降、昼食をはさんでの2時間半、栃木市観光ボランティアガイド清田会長の案内で、街中に現存する数多くの蔵の街並や、その昔舟運として利用された巴波川(うずまがわ)周辺の景色、現在も市庁舎別館として使用されている大正時代の建造物である洋館、県庁所在地であった当時の名残の県庁堀やお堀と巴波川を繋ぐ水路、そこに泳ぐ無数の鯉、山車会館、蔵造りの美術館などなど、市内の要所をスピード見学して回りました。



例幣使道沿いの蔵の街並

「蔵の街・とちぎ」の街づくりは、市内に現存する400近い蔵造りの建物と街中を流れる巴波川や洋館を核に、1988年に着手。栃木駅を中心とした街の形は、一瞬伊勢崎市と見紛う程でした。人

口 14 万 3 千人ほどの栃木市の街づくりは、既存の歴史的建造物を残し、それらに改修や修景を施し、お店や公的施設として新たな命を吹き込みました。

大きなポイントは大通り(例幣使道)をシンボルロードとして位置付け、視界を遮る電柱や歩道橋を撤去し、歩道を改修した事、そして、両側建物の「看板建築」部分を撤去し、後ろに隠れていた町屋造りの建物を表に出した事です。また舟運として栄えた街中の巴波川沿いを修景し遊歩道として整備し、街中の各所に駐車場や広場、ポケットパークを整備した



巴波川(うずまがわ)

事、山車会館や美術館、観光館を建設し県庁堀と洋館の庁舎別館を修景したこと、なども挙げられると思います。

このようにして進めた栃木市の街づくりは数々の賞を受賞していますが、平成 21 年には国土交通大臣賞である都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」を受賞しています。

街中の様子は紙面の都合で詳しく紹介できませんが、そこに降り立てばすぐに気が付くように、美術館や郷土館、歴史伝説館などの公的施設、和風カフェや旬菜の店、食べ物屋、お土産屋、古道具、荒物店などの多くが蔵造りで、顕著な例では駐車場の受け付けの建物やトイレなど、果てはジュースの自販機まで蔵造りの化粧が施され、とにかく街中の何から何まで蔵造りで、まさに栃木市のキャッチコピー「蔵の街・とちぎ」の通りでした。

この日は要所を効率良く案内頂きながらも、たった数時間で「蔵の街・とちぎ」を知ることは無理だったようで、頭の中はオーバーフローする情報でグルグル回転していました。また、次の機会を改めてと出かけようと思った次第です。

栃木市の後には那須塩原市に向かい、旧青木那須別邸を見学。那須の林に囲まれた白壁の大きな洋館は優雅で気品溢れる佇まいでした。このような建物が伊勢崎市にもあれば・・・などと叶わぬ夢を見たひと時でした。

旧青木家那須別邸は、明治時代にドイツ公使や外務大臣、駐米全権大使などを歴任した子爵青木周蔵氏の別荘として明治 21 年(1888 年)に建築されました。

青木邸の見学後、帰路是那須街道の道路脇に立つ看板規制の成果を車窓から確認しました。

那須街道の道路脇に立てる看板に対して、地色や裏面等「支柱は焦げ茶色、文字は白か黒」と言う色彩規制がかけられ、セーブオンやセブンイレブンなど、伊勢崎市周辺でもお馴染みの看板が



とちぎ蔵の街美術館

事、山車会館や美術館、観光館を建設し県庁堀と洋館の庁舎別館を修景したこと、なども挙げられると思います。

このようにして進めた栃木市の街づくりは数々の賞を受賞していますが、平成 21 年には国土交通大臣賞である都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」を受賞しています。

街中の様子は紙面の都合で詳しく紹介できませんが、そこに降り立てばすぐに気が付くように、美術館や郷土館、歴史伝説館などの公的施設、和風カフェや旬菜の店、食べ物屋、お土産



巴波川(うずまがわ)沿い



旧青木那須別邸

「焦げ茶と白」に統一され周囲の風景に同化している光景は、落ち着きがあってむしろ新鮮でした。

伊勢崎市でも「伊勢崎市屋外広告物条例」に基づき、屋外広告物が規制され現在、違反広告物に対して是正指導や除却を進めています。街中を通過する時、違法看板で視界を遮っていた場所が、少しずつ改善されている事を皆さんもお気づきのことと思います。

良好な景観は、市民の財産でありその地域の品格でもあります。「街づくりは景観づくりから」と言っても過言ではありません。地道で長い年月を要する活動ではありますが、倦まず弛まず(うまずたゆまず)その一助となる活動を続けて行きたいと改めて自覚した今回の視察でした。

(2010/10/26 景観サポーター上岡)

蔵の街 視察で感じたこと

伊勢州市の景観サポーター活動に参加し、景観先進地として去年は小布施町、今年は栃木市を視察したのでその印象を述べます。

バスから降りて、蔵や昔風に修景された町並みを見回すと、最初に日常と異なる雰囲気を感じました。出発前にガイドさんに聞くと「栃木市は空襲を受けなかった。」との事でした。それで古い蔵などが残っているのだろうか。いざ、見学のコースを歩き始めると昔懐かしい蔵や巴波川(うずまがわ)に浮かぶ船が目に入り、古き良き時代の古里を観るような印象を受けました。

驚いたことは延々と続く町歩きの人々の楽しそうな姿でした。東武鉄道・蔵の街健康ハイキングには、毎回数千人の都会を中心とした人が参加するとの事でした。都会から引き寄せる来客数の多さに、その魅力の源泉は何なのかとつい考えてしまいました。

我々を案内してくれた栃木市観光ボランティアガイド清田会長さんは「廃藩置県後に栃木市に置かれた県庁が宇都宮市に移されたのは、当時の知事が今日の事を考えてくれた先見性のある判断だった。」と信じると説明してくれました。

その言葉の裏に「都市間競争のハンディを克服してここまで来たのです。」という自負心を垣間見た感じがしました。

県庁跡に建てられた栃木町旧庁舎は大正期の西洋建築を今に伝える国の登録有形文化財に指定されており現役の市役所別館として教育委員会と教育研究所が配置されています。

歴史的建造物の陳列ではなく、本来の機能を発揮させつつ、景観資源としても活用しているところに栃木市の景観街造りの素晴らしさを感じました。

栃木市も昨年視察した小布施町も歴史的資産を活用した本格的な景観街興しは、少子高齢化が進む昭和末期頃から始められました。何もしなければ地域が衰退するという危機感を、歴史的資産・景観を起爆剤とした官民一体の街造りを通し結束し克服してきた結果、今日の姿があるのではないかと思います。



栃木町旧庁舎



東京のビル(2008)

巴波川(うずまがわ)の船(2010)

小布施中心街のトイレ(2010)

都会の魔力はあらゆるものを引き寄せます。

しかし、人口 14 万 3 千の栃木市や 1 万 1 千の小布施町は地方都市ながら年間 200～100 万の観光客を呼び込むとの事です。

写真中央は巴波川に船を浮かべ人目を川に向けさせる心憎い演出で、商都の水運が盛んな頃を彷彿とさせてくれます。

写真右は小布施町街中のトイレで、全てに取手が付いていました。栃木市や小布施町が街興しで成功した秘密も、このような工夫を積み重ねつつ地域固有の資産を生かし、よそに真似できないサービスを提供できた事にありそうです。

小布施町の「平成 20 年度観光経済波及効果測定調査報告書」の産業別就業者数の推移(第一次～第三次産業の順)は、昭和 60 年 31.3 /34.1/34.7、平成 17 年 23.9/27.9/48.2 と町全体としては農工商を融合した第六次産業化(6次=1次×2次×3次)が進んでいるように感じました。

この視察で地域の人々の挨拶等もてなしの心を感じられたのも収穫の一つです。景観もハードとソフトの集積で特にソフトの重要性を改めて強く感じました。

(2010/10/26 景観サポーター 重田泰嗣)

『栃木市』蔵の街歩きで感じたこと



2010年10月23日、景観サポーターの仲間の方と、隣県栃木県栃木市の街歩きを行いました。驚きました。栃木市が「蔵の街」の観光地として人気スポットになっていることは、知っていたのですが、ここまで統一的に整備された街であったとは思ってもみませんでした。

街の中心を流れている江戸時代、運輸交通の要として利用されていた巴波川の存在、400棟も現存すると言われる蔵造りの建物などハードな利点があるとしても、そのハードを改修し、維持保存していこうという市民の意思がなければ、今の「蔵の街」は存在しなかったのではないのでしょうか。

私は、栃木市「蔵」の街を歩きながら「市民、行政が地域資源を大事にしていこう」という同じ方向を向いて歩んできた。という意味をほんとうに感じました。その結実として今の観光人気スポット「小江戸栃木蔵の街」があるのではないのでしょうか。街を歩き見た、巴波川の流れ、幸来橋、多くの蔵の風景、県庁堀、市役所分室等、どのスポットも街の統一感を感じました。

街歩きの魅力は、ちょっと横道に入った時に“こんなものが残っている！”とか“こんな店があるのか！”というような「新しさの発見」をすることにあると思います。栃木市はそんな魅力に溢れた街でした。

(2010/10/26 景観サポーター 角田)

景観サポーター情報紙「いせさき美尋」とは？

美尋の「美」→多方面から考察した美しいもの。「尋」→素晴らしい景観を尋ね求める。対象物の本質の探究。

景観サポーターは、伊勢崎の自然、歴史、地域文化、先進性等景観の大切さ・素晴らしさ・美しさを多方面から尋ね(美尋)、景観の価値を学び・発見すべく研鑽を重ね、その発表の場を「いせさき美尋」と名付けました。

発行／いせさき景観サポーター編集部 びじん

『いせさき美尋』景観サポーター情報紙第2号

平成23年1月1日発行 連絡先／090-1252-2509(佐藤)